

児塚遺跡

KOZUKA SITE

緊急発掘調査概報

伊那市教育委員会
伊那市建設部土木課

ご あ い さ つ

先人達は天竜川や周囲に取りまく山々を眺望しながら、竜西段丘面に繩文人としての息吹きを残しました。こうした生活跡は、西春近地区に周知されているものだけでも78カ所あります。多くは、中央高速道路、土地改良事業等の開発の波のなかで、すでに破壊されたり、また破壊されようとしています。

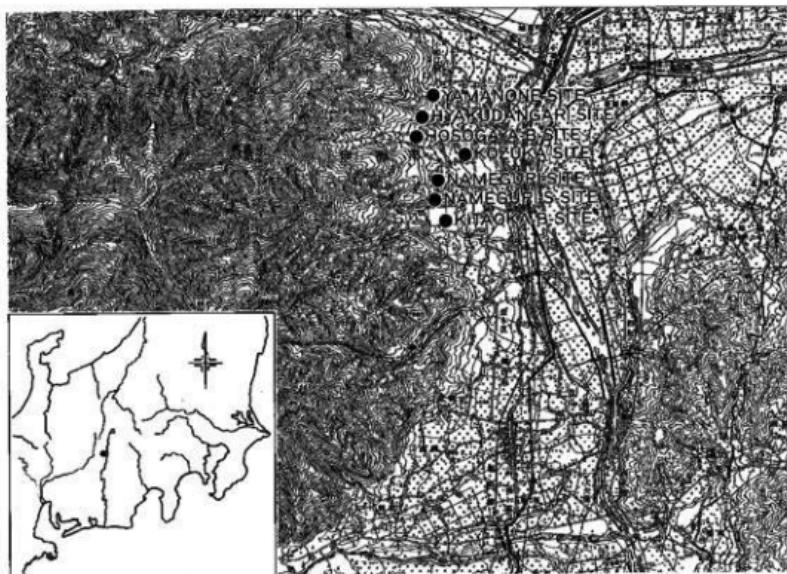
この、児塚遺跡も例外ではなく、大規模農道開通のために、50日に及ぶ長期の発掘調査が行なわれ、上伊那でも珍しい繩文早期の遺構、遺物が多数発見されました。

炎天下のもとに調査に努力された団長友野良一先生、調査員各位、作業員各位、調査の進行に多くの便宜をはかって下さった伊那市建設部土木課職員に深く感謝の意を表します。

昭和53年3月3日

伊那市教育委員会教育長 伊 沢 一 雄

1. 児塚遺跡とその環境



遺跡分布図（児塚遺跡付近の早期の遺跡）（1：100,000）

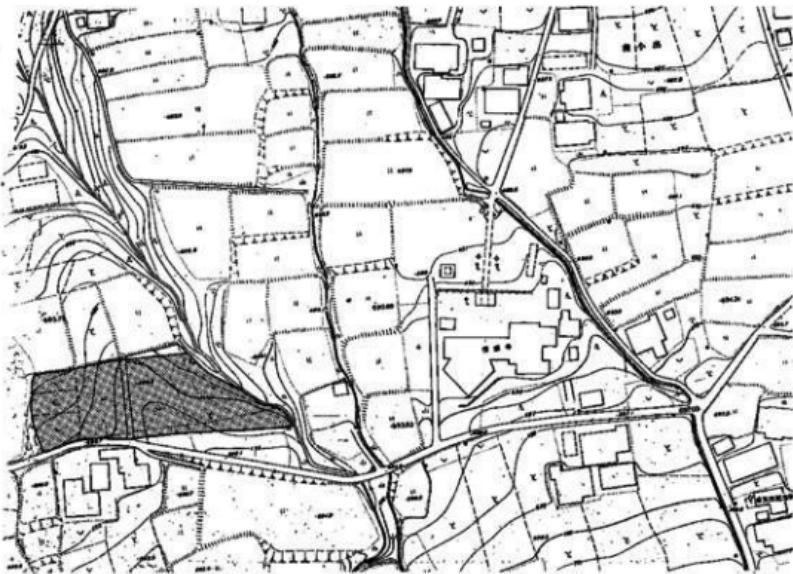
位置と地形

児塚遺跡は長野県伊那市西春近白沢に所在しており、天竜川の右岸、中央アルプスの前山である権現山の東山麓、東に細長く発達している扇状地のほぼ中央部に位置しており、北側は戸沢川と南側は犬田切川にはさまれ、またその間には小戸沢川が流れ、緩やかに傾斜する台地上にある。これららの河川の他にも小さな沢がいくつもあり、起伏にとんだ地形を形成している。

地層は、西山麓より供給されたホルンヘレス礫を多量に含んだ土砂の、たび重なる押出しによって複雑であり、その砂礫層の厚さは1m以上にもおよんでいるが、調査区40列より南にはこのような礫層ではなく、安定したソフトローム層が基盤となっている。

周辺の遺跡

本地域には大小さまざまな河川が西山ふところ深くに源をなし天竜川にそいでおり、このような河川の近くに多くの遺跡が分布している。本遺跡の北側、小戸沢川の右岸には浜射場・宮の原向遺跡が、西側の上方には細ヶ谷A・B遺跡、山寺垣外遺跡、百駄刈遺跡等の遺跡が分布している。なお織文時代早期後半の押型文土器を出土する遺跡としては、本遺跡の西上方小戸沢川右岸の細ヶ谷B遺跡と同じく戸沢川右岸の百駄刈遺跡が知られており、それぞれ昭和47年度に長野県中央道遺跡調査團によって調査がなされている。



2. 遺跡の概要

遺跡の要約

検出された遺構はすべて縄文時代早期のものと思われる。縄文時代早期の押型文土器と撚糸文、織維土器を出土する遺構がほとんどであった。そのうちわけは、住居址1基、竪穴状遺構4基、土塙21基、ロームマウンド3基、集石址8基がある。

一方発掘された遺物は、縄文時代のものがほとんどで、土器、石器、剣片、焼碟、環がある。土器は押型文土器が中心にその主体をしめ、撚糸文系、茅山式等の織維土器もみられる。また中期、後期の土器片も微量ではあるが発見されている。石器には硬砂岩質のものが圧倒的に量的主体を占めており、円碟、礫器、横刃状剣片、磨石、打製石斧、石錘、石皿、その他の石器があり、黒曜石製のものが次に多く発見され、剣片石器が非常に多く、搔器、石鏃等も出土している。

発掘によって出土した遺物は以上のようにあるが、他にごく微量ではあるが土師器（恐らく奈良時代～平安時代のある時期と思われる）が発見されている。

遺跡の層序

遺跡の立地する段丘上の土層の堆積はかなり複雑な様相を呈している。ある部分では西山麓からのたび重なる押出の土砂によって、ローム層の部分が切りとられたようになっている所もあり、耕作土下から礫層となっている部分も見うけられる。今回の調査区内では割合と安定している部分の調査であり耕作土下がソフトローム層となっており、この耕作土は薄く堆積しており、厚い部分で20cm、薄い部分で10cmであった。



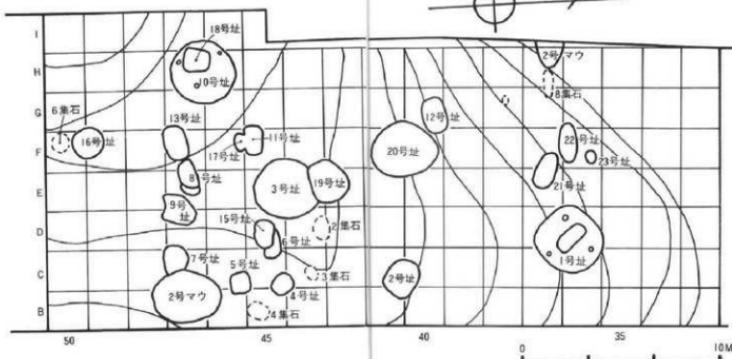
10・18号址

遺構平面分布図(1:200)

今回の調査地区において最も多くの時間を費やした地区である。東および北に傾斜する地形でありとくに北側への傾斜は急である。50例より南側は遺物量はかなり少なくなり、内容も押型紋等は少なく土師器、須恵器のたぐいの発見がなされた。



3・19号址



20号址



1号址覆土の状態



2号マウンド



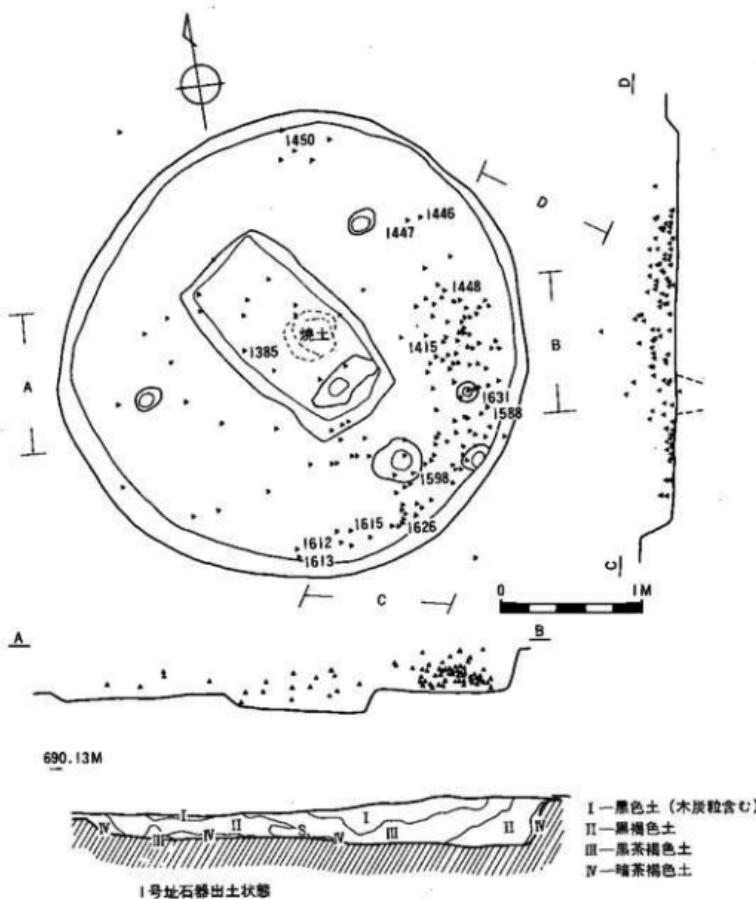
全 畠



地 層



1号址



3. 1号址及び他遺構の概要

今回の調査によって発見された遺構のうちで焼土をもった竪穴は1号址の1基のみであり、他の竪穴状の遺構からは焼土は検出されなかった。

1号址は平面プランはほぼ円形を呈し、その規模は南北軸が3.34mを東西軸が3.32mを測る。北に向ってかなり急激に傾斜する面に構築されており、柱穴状のピットは5本ありうち3本は主柱穴と考えられる。住居址の中央部には土塙があり、本址はこの土塙上に貼り床してあり、その部分は若

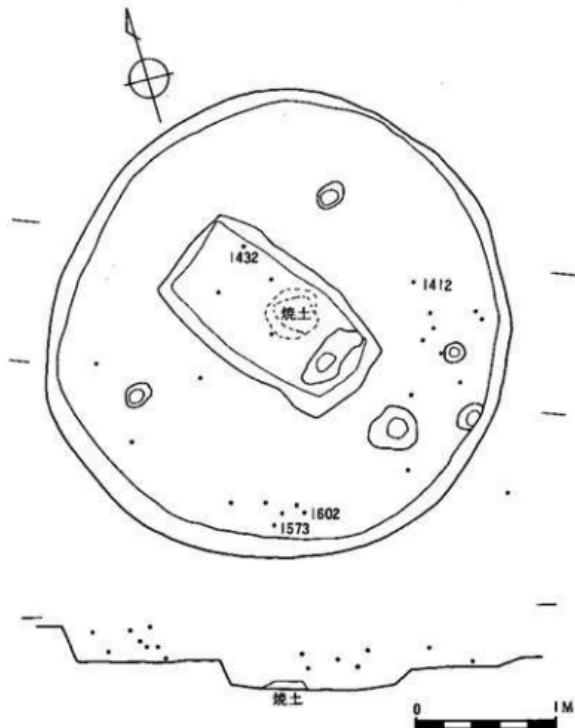
干底くさがっていた。この貼床された中央部に焼土が堆積しており、地床炉となっている。覆土の上層から中層にかけて本址のほぼ中央部にかなりの量の礫が集中していた。

本址出土遺物についてみると、土器の量は20数点の少量であるのに対して、石器の量はおびただしい量にのぼっており、そのほとんどすべてと言えるほどの量を黒曜石がしめている。その出土状態をみてみると住居址南東寄りに全体の80%近い量の石器が集中して出土しており、覆土の中層から床面直上にかけてまんべんな

く出土している。なお床面直上において黒曜石のチップ出土がおびただしい量にのぼっている。このようなことから、覆土上層の遺物はともかくも、下層の遺物に関してみれば他から廃棄されたものとは考えにくく、石器製作途中にできたチップであり剝片であると考えたい。

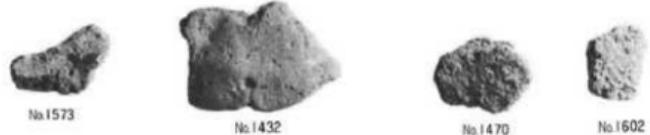
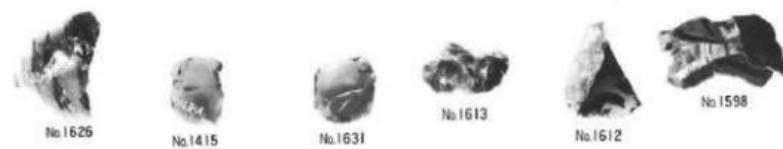
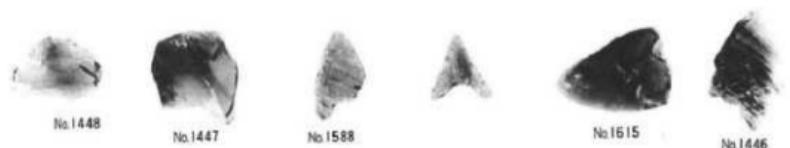
この1号址に対して好対称をみせているのが10号址である。ほぼ円形の平面プランを呈し、その規模は $3.30m \times 3.20m$ を測り、割合平坦な床面をもっている。18号址に切られておりその全体は明らかではないが、1号址に比べて石器の量は少ないが土器の量が多く注目される遺構である。

このほかに堅穴状遺構としては、3号、14号、20号址があり、3号址はやや長円形を呈する平面プランを呈し、長軸約3mと少々、短軸約3mを測る。20号址もほぼ長円形のプランを呈し、長軸約3.40m×短軸2.80mを測りかなり軟弱な床面をもっている。14号址はこれらの遺構に比べて規模は小さく $2.10m \times 1.80m$ を測り3号址を切っている。土塙は落し穴状のものが多く、他にはローム面よりかなり上層の黒色土層に集石址が発見された。



1号址土器出土状態

No.は発掘No.



I号址出土遺物



No.1288



No.1285



No.1491



No.948



No.1299



No.1343



No.707



No.699



No.1177



No.527



No.679



No.846



No.148



No.147

先秦遺跡出土遺物 (I)



No.132



No.1292



No.750



No.846



No.714



No.1376



No.214



No.554



No.127

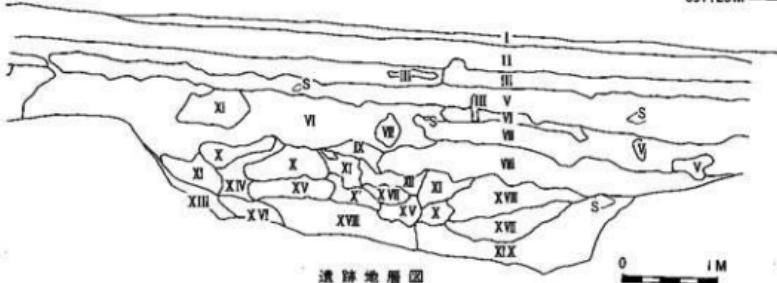


No.1545



No.1093

见塚遺跡出土遺物 (2)



I—耕作土

II—礫積土

III—砂質黃褐色土混入砂質暗褐色土—①

IV—III—②(①より黒色土が強い)

V—真黒色土

VI—褐色が強い黒色土。VI—褐色がより強い。

VII—黒色土

VIII—砂質黃褐色土混入砂質黑褐色土(小礫混入)

IX—砂質黃褐色土混入砂質黒色土

X—白色砂質土混入黄色砂質土。X—砂質黒色土混入

XI—砂質黃白色土混入暗黒褐色土

XII—黄緑色砂質土

XIII—真黒色砂質土。XIII—褐色が強い。

XIV—XI+砂質土

XV—X+砂質土

XVI—XI+砂質土

XVII—礁層+暗褐色土

XVIII—白色礁層

XIX—黄褐色礁層

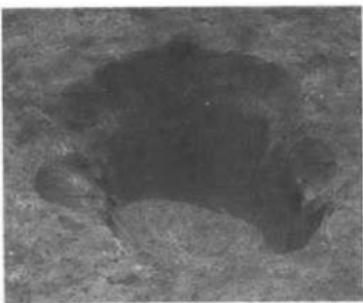
5. まとめ

今回の調査で目をひくのは硬砂岩等の石器の量の多いことである。このような石器が何故にこのような状態で出土したのか、大きな問題点である。この硬砂岩質のものをみると、円礫、円礫を半分に割ったもの、円礫から剥片をとったもの、剥片、と一様のものは出土しており、かなり小さな剥片等も出土している。このような視点から考えると、石器を廃棄した場所という考え方たは成り立たず、石器を製作した場所と考える方が妥当と思われるが、周辺の遺跡等の関連も考慮せねばならぬ、今後に検討をしてゆきたい。

遺構についてみると、それぞれから出土する土器に押型文土器があり、この時期の遺構と考えることが可能である。土括についても2号址等から押型文土器が出土しており、他の土括もほぼこの時期のものと考えてよいと思われる。なお土括内に石皿が入っているものが1基あり、注目したい。

本遺跡の西上方には細ヶ谷B遺跡と臼歯刈遺跡があり、それぞれ多量の押型文土器を出土した遺跡である。このように本遺跡の性格を考えるうえに重要な遺跡であり、移動生活・居住領域等々の問題を考えあわせ今後検討してゆきたい。

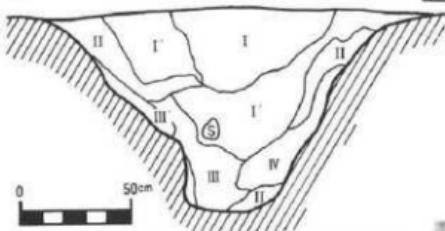
なお、石器の組成から遺跡の性格をうかがうと、石鏃、石匙等の狩猟具および解体具の出土はきわめて少なく、また石皿、磨石等の食料加工工具の出土も少ない。このようななかで、円礫、円礫を半分に割ったもの、等の用途不明の石器の量が非常に多く、このへんの解明が本遺跡の性格の解明につながると思われる。



← 2号址と2号址セクション

↑ 4号址

690.70 M

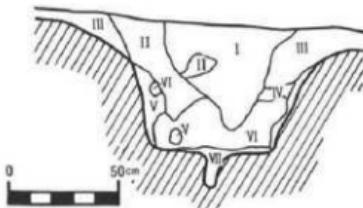


690.85 M



← 6号・15号址と4号址セクション

↑ 13号址

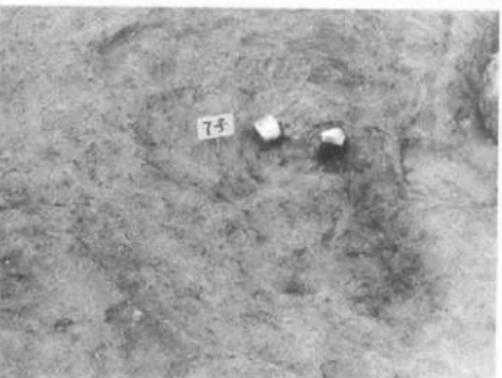


上 11号・17号址
中 9号址
下 7号址



住居址・竪穴状造構・土塙の規模一覧

1号址	—330cm×328cm	深さ25cm
2号址	—187cm×143cm	〃 95cm
3号址	—310cm×300cm	〃 16cm
4号址	—122cm×105cm	〃 57cm
5号址	—106cm×106cm	〃 21cm
6号址	—125cm× ?	〃 25cm
7号址	—131cm×125cm	〃 20cm
8号址	—170cm×113cm	〃 17cm
9号址	—170cm×129cm	〃 23cm
10号址	—338cm×322cm	〃 19cm
11号址	—102cm× ?	〃 84cm
12号址	—157cm×157cm	〃 95cm
13号址	—197cm×121cm	〃 93cm
14号址	—200cm×196cm	〃 15cm
15号址	—148cm×124cm	〃 69cm
16号址	—150cm×156cm	〃 105cm
17号址	—157cm× ? cm	〃 83cm
18号址	—150cm×127cm	〃 69cm
19号址	—157cm×139cm	〃 28cm
20号址	—342cm×307cm	〃 33cm
21号址	—196cm×117cm	〃 56cm
22号址	—194cm×98cm	深さ71cm
23号址	—90cm×81cm	深さ20cm

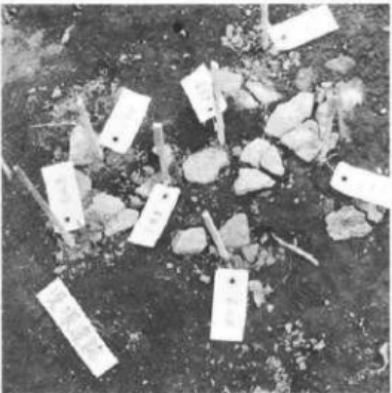




グリット設定



10号址調査状況



遺物出土状況



スナップ (1)

耕土はぎ



遺物出土状態



I号址調査風景



I号址調査風景

スナップ (2)

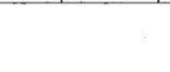
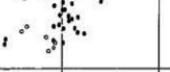
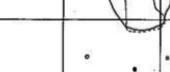
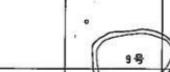
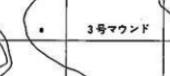
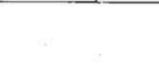
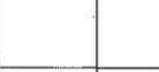
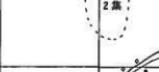
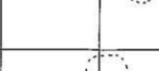
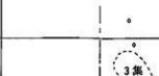
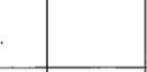
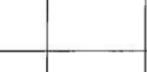
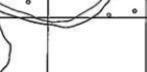
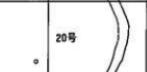
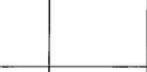
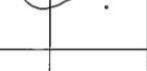
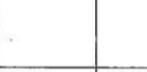
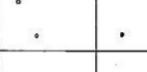
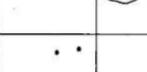
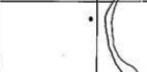
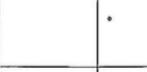
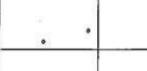
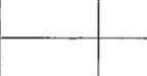
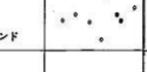
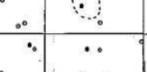
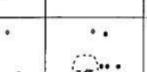
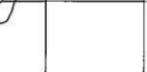
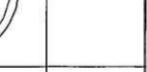
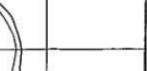
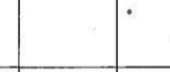
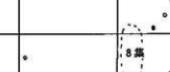
出土遺物一覧表

整理編	発掘番号	グリット	標高 (m)	石質	石器種類	土器	
						内訳	型式 or 種類
1	1666	E-50	690.99	黒耀石	剝片		
2	1667	E-50	690.99	"	"		
3	1230	E-50	691.12	硬砂岩	"		
4	1231	E-50	691.14	黒耀石	"		
5	1232	E-50	691.02	硬砂岩	"		
6	1233	E-50	691.06	黒耀石	"		
7	459	E-50	691.10	硬砂岩	円盤を半分に割ったもの		
8	1248	D-48	691.02	"	剝片		
9	1229	E-49	691.12	黒耀石	"		
10	1227	E-49	691.06	"	"		
11	1228	E-49	691.11	"	"		
12	1668	E-49	690.98	"	"		
13	1669	E-49	690.98	"	"		
14	1252	E-49	691.11	"	"		
15	1674	E-49	691.06	"	"		
16	447	E-49	691.12	硬砂岩	"		
17	506	G-37	689.75	"	円盤		
18	501	G-37	689.74		焼石		
19	131	G-37	689.76	黒耀石	剝片		
20	104	G-37	689.79	?	打製石斧		
21	105	G-37	689.77	硬砂岩	円盤の半分割れ		
22	109	G-37	689.78	"	敲器		
23	106	G-37	689.74	"	螺旋器		
24	107	G-37	689.70	"	円盤		
25	128	G-37	689.70	?	?		
26	101	G-37	689.10	黒耀石	剝片		
27	242	B-40	690.29	硬砂岩	円盤の半分割れ		
28	243	B-40	690.29	黒耀石	剝片		
29	244	B-40	690.33	?	打製石斧		
30	245	B-39	690.29	硬砂岩	円盤の半分割れ		
31	248	B-39	690.25	黒耀石	剝片石器		
32	1234	E-50	690.88			押型文	格子目
33	1235	E-50	690.88			"	"
34	1236	E-50	690.88			"	"
35	1237	E-50	690.96			"	"
36	1238	D-50	690.96			"	"
37	1239	E-50	690.95			"	"
38	1240	D-50	690.93			"	"
39	1241	D-50	690.93			"	"

出土土器分布図

- 捺型文
- 早期
- 前期
- 中期
- 後期
- ◇ 不明
- 土師器

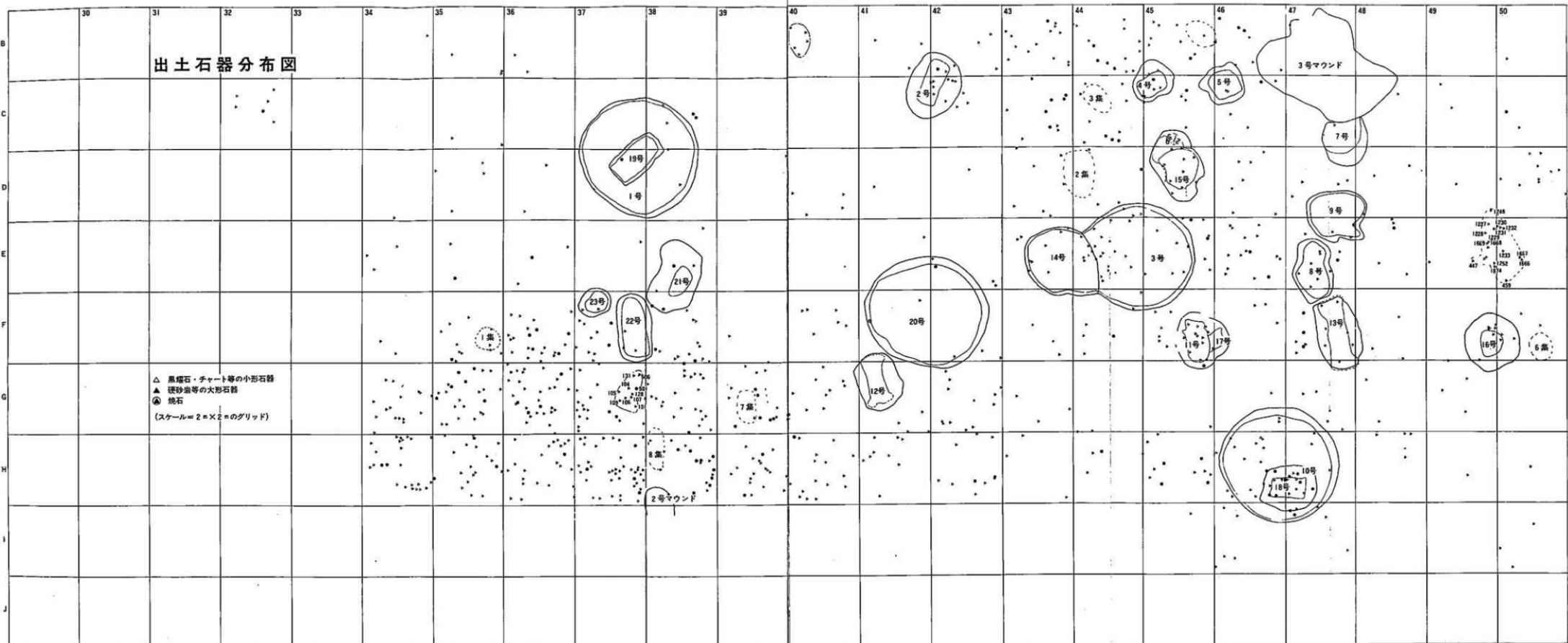
(スケール=2m×2mのグリッド)



1231
1232
1233
1234
1235
1236
1237
1238

1239
1240

出土石器分布図



児塚遺跡発掘調査会

〔調査委員会〕

委員長	伊沢 一雄	伊都市教育委員会教育長
副委員長	福沢 総一郎	伊都市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽 眞士	伊都市教育委員長
調査事務局	竹松 英夫	伊都市教育委員会社会教育課長
"	有賀 武	" 課長補佐
"	米山 博章	" 係長
"	三沢 真知子	" 主事

〔発掘調査団〕

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会员
"	御子柴 泰正	"
調査員	飯塚 政美	"
"	田畠 長雄	"
"	福沢 幸一	"
"	荻原 茂	"
"	小木曾 清	宮田村文化財審議委員

〔発掘協力者〕

平沢 公夫・平沢 平治・唐木 淳・唐木 薫
北原 清司・小出百合子・酒井とし子・戸苅千鶴子
辰野みさ子・浦野節子・原修一・平沢善雄
春日松巳・平沢八千子・小松英雄・宮下眞司
東野 広次(順不同)

児塚遺跡 ～緊急発掘調査概報～

昭和53年3月4日 印刷
昭和53年3月6日 発行

発行所 長野県伊都市教育委員会
印刷所 伊都市 小松純合印刷㈱